

「水のある風景」の描画とY-G性格検査との関連

三宅 理子*

Riko MIYAKE

The Waterscape Drawing Method and Y-G Personality Test

要 約

心理療法の過程で水イメージの重要性について考えさせられる機会が多い。本研究においては、「水のある風景」の描画とY-G性格検査との関連を検討した。水辺の種類を要因として、Y-G性格検査の12尺度得点、6因子得点について一元配置の分散分析を行った結果、協調性のなさの得点が海描画群に比べ雨描画群が高いことが確認された。さらに、絵がどのように描かれているかによって「水の形態」を「開」「流」「閉」「器」「滴」の5つに分類し分析に用いた結果、協調性のなさが「開」に比べ、「器」「滴」が高く、一般的活動性は「流」に比べて「滴」が低く、主導性得点は「閉」に比べて「器」が低いことを確認した。

以前、箱庭で表現される「水のある風景」とY-G性格検査との関連を検討したが（三宅，2004），それとはかなり異なる結果が得られた。その理由としては，まず，今回は箱庭では表現することが難しい雨の風景や生活に関わる水が多く表現されたことが挙げられるであろう。また，砂を掘ることによって表現する箱庭での水と，自ら色を塗ることによって作り出す描画における水とでは，その表現の意味合いがかなり違うのではないかということが示唆された。

【キーワード：水のある風景，水イメージ，描画，Y-G 性格検査，箱庭】

問題と目的

心理療法の過程において、「水」が登場することは多い。プレイルームにて，実際に水を使って遊ぶ子どもたちも多く存在するし，絵に水が描かれることも少なくない。また，箱庭において水辺の風景が表現されることもあるし，夢に水が登場することもしばしばである。

『世界シンボル大事典』によると，「水を持つ象徴的表意作用は，①生命の源，②浄化の手段，③再生の中心という，三つの主要なテーマに還元でき」という。また，Jung（1954/1982）は「集合的無意識のいくつかの元型について」という論文の「水と無意識」の章において，「水は無意識を表すために一番よく使われるシンボルである——中略——水とは心理学的に言えば，無意識になってしまった精神ガイストのことであり」と述べており，治療過程を理解する際に水イメージの重要性について指摘されることは多く，特に夢に登場する水に対しては，様々な解釈がなされている（Anderten,1986/1992）。

田熊（2008）は，心理療法における「水」イメージを<対象>として取り上げ解釈するのではなく，水イメージ自体が心理療法の<主体>として治療を動かしていくという視点を自らの事例を通じて提示している。「固体」「液体」「気体」の三態変化する水の特性そのものに注目して，心理療法のプロセスにおける「水」イメージの<三態変化>がどのように生じているかに注目し，そ

の「水」イメージの変容と動きが治療プロセスをどのように動かす契機となっていったのかについて詳細に考察を行っている。

このように，様々な角度からその意味を探るためのアプローチがなされている「水」イメージであるが，筆者は風景としての「水」のイメージの重要性に注目している。

千田（1992）は，風景が身体の眼の位置以外ありえない日常生活者の視点であるのに対し，景観は近代地理学者の無限大の彼方にある視点であるとし，風景という言葉は「主観的」であり，景観という言葉は「客観的」であると，両者を区別している。また，Berque（1990）は風景を「主体と客体対象の間の関係の現実」とし，風景においては「主観的なものは必然的に客観的なものと合成され，主体と客体という近代の二分法は有効性を失う」と述べている。さらに樋口（1981）は人間には二種類の風景，懐かしく抱いている心の中の風景と眼前の現実の風景があるとし，人は，現実の風景よりもイメージとしての心の中の風景の方に高い価値をおいて，そちらを本当の風景だと思っているようだと指摘している。

このように風景は人にとって単なる客体ではあり得ず，人はどのように風景とつきあっているのか，また，どのような風景からどのようなメッセージを受け取るのかということに筆者は強い関心を抱いている。また逆に，人が想起し，表現する風景はその人の心情と密接に関わ

* 島根大学教育学部心理・発達臨床講座

っているものであるとも考えている。そしてそこに、先述した「水」が風景の構成要素の一つとして深く関わっているに違いないと考えるのである。

人が表現する風景とところのあり様との関連を探る取り組みとして、筆者は以前、箱庭で表現される「水のある風景」と Y-G 性格検査との関連を検討した(三宅, 2004)。「水のある風景を作ってください」という教示のもとで制作された箱庭について、作品の水辺の種類を分類し Y-G 性格検査の 12 尺度との関連を分析したところ、特に湖制作群と海制作群との間に差が見られ、湖制作群の方が、攻撃性・活動性が低く、内向であるという結果が得られた。「水」の循環を考えると、水の閉じられたゴールである湖に比べて、海は開かれたゴールでありながらスタートでもあり、そのような点で湖と海は対照的であるともいえる。また、湖は閉じられた動かない静かな「水」であり水面には自分の姿が映ることから、Bachelard (1942/1969) の「水は影を吸収する」という水鏡の心理学的効用を紹介しながら、湖イメージの考察を行った。

描画法で水の風景を扱うものとしては、中井久夫の考案した風景構成法がある。これは、指定した 10 のアイテムを順に描きいれて風景を完成させるものであるが、アイテムの一番はじめが川になっている。風景構成法の作品を読み取るにあたり、この川の描き方はとても重要であると考えられており(皆藤, 1994)、ここにも水の表現の重要性を見てとることができる。ここでは水イメージの理解だけでなく、川イメージの理解が大きな意味をもつ。風景構成法においては、紙面を分割する、世界を分割するものとして川の描かれ方に注目することが多い。

この風景構成法以外には、水の風景の表現からその意味を探るような試みは現在のところないようである。そこで、本研究では「水のある風景」の描画と Y-G 性格検査との関連を検討する。「水」は自然のなかで様々な形態をとって風景として存在しており、そのあり様一つひとつに特別な意味がある。人が表現する風景のなかの水のあり様と心情との関連を探ることによって、心理アセスメントにおける「水」の新たな位置づけを行うことが可能になると考えるからである。

さらに、先ほど紹介した箱庭での「水のある風景」と Y-G 性格検査との関連で得られた結果と比較し、箱庭における水の表現と描画における水の表現の違いについても検討する。

方 法

1. 対象

調査協力者は、中国地方の国立大学に通う大学生 80 名(男子 31 名, 女子 49 名, 平均年齢 20 歳)である。

2. 実施方法

まず、20 名から 30 名の集団にて描画を実施した。2 人 1 組を作り、それぞれがフェルトペンで枠付けしたケン

ト紙をペアで交換し、相手が枠付けしたケン紙に絵を描くよう求めた。教示は「水のある風景を自由に描いてください」とし、鉛筆、消しゴム、フェルトペンの使用は自由とし、彩色にはクレパスを用いた。

描画後には、絵の概要や絵に対する感想、水に対してもっているイメージ等を問う描画後質問紙への回答を求めた。さらに後日、集団で Y-G 性格検査を実施した。実施時期は 2007 年 5 月であった。

3. データの整理

(1) 「水のある風景」の描画

水のある風景の特徴として、描画後質問紙の回答より「水辺の種類」、水の「流れの有無」、「動きの有無」を取り上げた。また、絵に描かれた「天候」を描画後質問紙の回答より「晴れ」「雨」「不明」の 3 つに分類し分析に用いた。

さらに、絵の描かれ方により、検査者が「水の形態」を「開」「流」「閉」「器」「滴」の 5 つに分類し、分析に用いた(表 1)。

表 1 「水の形態」の分類

形態	水の描かれ方
開	海などで水平線が描かれており、水が続いていることが強調されているもの
流	川や滝などで、水がある一定の方向へ流れていることが強調されているもの
閉	湖や池などで絵の中で水が囲まれているもの
器	コップや水槽のように、水が器の中に入っているもの
滴	雨や雫のように、水滴が強調されているもの

(2) Y-G 性格検査 (以下 Y-G と略す)

水のある風景の特徴と Y-G との関連についての分析には、Y-G の 12 尺度と 6 因子の得点、さらに 5 つの類型分類を用いた。12 尺度については、それぞれの尺度の得点そのものを、6 因子については、その因子に関わるすべての尺度の得点を合計し、6 因子の得点として比較検討に用いた。Y-G の 6 因子は表 2 のとおりである。

Y-G の 5 つの類型とは、A 類 (平均型)、B 類 (不安定不適応積極型)、C 類 (安定適応消極型)、D 類 (安定積極型)、E 類 (不安定消極型) である。

分析方法と結果

1. 水のある風景として描かれたもの

風景の種類としては、川、海、湖、滝、池、雨、噴水、コップの水 (飲用水、花など)、ポット、水槽、金魚鉢、蛇口、水溜り、泉、想像上の水などが登場した。

表2 Y-G12尺度の6因子

因子名	因子に関わる尺度
情緒不安定性	抑うつ性 回帰性傾向 劣等感 神経質
社会不適応性	客観性のなさ 協調性のなさ 攻撃的性質
活動性	攻撃的性質 一般的活動性
衝動性	一般的活動性 のんきさ
非内省性	のんきさ 思考的外向
主導性	支配性 社会的外向

描かれた水辺の種類分類は、原則として被験者の描画後質問紙の「水辺の種類」欄への記入内容に従って行った。コップの水やポット、蛇口については生活に関わる水（生活水と略す）にまとめた。また、今回描かれた水槽や金魚鉢は、部屋の中の観賞用ということだったので、これらも生活水にまとめた。水溜りについては、雨が降っている風景については雨に分類した。雨が降っていない水溜り、泉、想像上の水などについては件数が少なかったため、その他に分類した（表3）。

描かれた水辺の比率に差があるかどうかを調べるため、カイ二乗検定を行った結果、差があることが認められた（ $\chi^2(8)=22.38, p<.01$ ）。

また、描かれた水辺の種類に、性差の影響があるかどうかを調べるため、カイ二乗検定を行った結果、男女と水辺の種類の間、分布の差は見られなかった（ $\chi^2(8)=8.56, p>.05$ ）。

表3 描かれた水辺の種類

水 辺	男	女	計
川	5	4	9
海	9	11	20
湖	3	8	11
滝	1	4	5
池	1	7	8
雨	4	4	8
生活水	6	5	11
噴水	0	3	3
その他	2	3	5
計	31	49	80

2. 水のある風景の特徴とY-Gとの関連

(1) 水辺の種類とY-Gの類型との関連

水辺の種類とY-Gの類型とをクロス集計しカイ二乗検定を行った。その結果、水辺の種類とY-G性格検査の類型の間に分布の差はみられなかった（ $\chi^2(32)=20.31, p>.05$ ）。

(2) 水辺の種類とY-Gの12尺度、6因子の得点との関連

水辺の種類を要因として、Y-Gの12尺度得点、6因子得点について一元配置の分散分析を行った結果、要因による有意な効果がみられた。下位検定（Tukeyの多重比較）より、海描画群と雨描画群との間に、協調性のなさの得点に有意差がみられ（ $F(8,71)=2.16, p<.05$ ）、海描画群に比べ、雨描画群の得点が高かった（表4）。

表4 水辺の種類を要因としてY-G12尺度と6因子を分散分析にかけた結果、有意な効果がみられたもの

尺度	水辺	度数	平均値	標準偏差
協調性のなさ	川	9	5.89	3.52
	海*	20	5.25	3.58
	湖	11	7.55	5.22
	滝	5	7.60	8.29
	池	8	6.75	3.37
	雨*	8	11.25	3.58
	水道	11	8.91	3.51
	噴水	3	5.67	4.73
	その他	5	4.00	3.74
	計	80	6.98	4.49

(3) 水の形態とY-Gとの関連

水の形態とY-Gの類型とをクロス集計しカイ二乗検定を行った。その結果、水の形態とY-G性格検査の類型の間に分布の差はみられなかった（ $\chi^2(16)=13.26, p>.05$ ）。

さらに、水の形態を要因として、12尺度得点、6因子得点について一元配置の分散分析を行った結果、協調性のなさ（ $F(4,75)=3.42, p<.05$ ）、一般的活動性（ $F(4,75)=2.78, p<.05$ ）、主導性（ $F(4,75)=2.90, p<.05$ ）の得点に要因による有意な効果がみられた。下位検定（Tukeyの多重比較）より、協調性のなさは「開」に比べ、「器」「滴」が高く、一般的活動性は「流」に比べて「滴」が低く、主導性は「閉」に比べて「器」が低いことが認められた（表5）。

(4) 水の流れ、動きとY-Gとの関連

水の流れの有無と動きの有無を要因として12尺度得点、6因子得点について一元配置の分散分析を行った。「流れ」については客観性のなさ（ $F(1,78)=3.46, p<.01$ ）に、「動き」については攻撃的性質（ $F(1,78)=2.95, p<.01$ ）と社会的外向（ $F(1,78)=3.05, p<.01$ ）の得点に有意な効果がある傾向がみられた。流れがある方が客観性がなく、動きのない方が攻撃的でなく社会的内向であるという結果であった（表6）。

表5 水の形態を要因としてY-G12尺度と6因子を分散分析にかけた結果、有意な効果がみられたもの

尺度・因子	形態	度数	平均値	標準偏差
協調性の なさ	開*	23	5.00	3.95
	流	13	7.00	5.31
	閉	25	6.64	4.27
	器*	11	9.45	3.11
	滴*	8	10.25	4.37
	計	80	6.98	4.49
一般的 活動性	開	23	9.87	4.58
	流*	13	13.08	3.77
	閉	25	11.24	4.98
	器	11	10.00	3.66
	滴*	8	6.63	5.45
	計	80	10.51	4.77
主導性	開	23	21.96	8.92
	流	13	25.31	9.36
	閉*	25	24.72	10.56
	器*	11	15.00	7.13
	滴	8	17.88	8.44
	計	80	22.00	9.73

表6 水の流れと動きの有無を要因としてY-G12尺度と6因子を分散分析にかけた結果有意な効果がみられたもの

尺度	水の特徴	度数	平均値	標準偏差
客観性の なさ 計	流れなし	41	8.49	3.25
	流れあり	39	10.15	4.67
	計	80	9.30	4.06
攻撃的 性質 計	動きなし	21	7.76	5.49
	動きあり	59	9.83	4.45
	計	80	9.29	4.80
社会的 外向 計	動きなし	21	10.05	6.45
	動きあり	59	12.54	5.30
	計	80	11.89	5.69

(5) 絵に描かれた天候とY-Gとの関連

天候を要因として12尺度得点、6因子得点について一元配置の分散分析を行った結果、協調性のなさ ($F(2,77)=8.37, p<.01$)、支配性 ($F(2,77)=4.36, p<.05$)、社会的外向 ($F(2,77)=3.23, p<.05$)、社会不適応 ($F(2,77)=3.88, p<.05$)、主導性 ($F(2,77)=4.51, p<.05$) の得点に有意な効果がみられた。下位検定 (Tukeyの多重比較) より、雨を描いた人は晴れや不明の人より協調性がなく、天候が不明な絵を描いた人は晴れの人より支配性や社会的外向が低い結果であった。また社会不適応得点は晴れの人より雨の人が高く、主導性は晴れの人より天候が不明の人の方が低いという結果であった (表7)。

表7 天候を要因としてY-G12尺度と6因子を分散分析にかけた結果、有意な効果がみられたもの

尺度・因子	天候	度数	平均値	標準偏差
協調性の なさ	晴れ*	60	5.92	4.37
	雨*	8	11.25	3.58
	不明*	12	9.42	2.97
	計	80	6.98	4.49
支配性	晴れ*	60	10.97	4.86
	雨	8	8.75	4.53
	不明*	12	6.75	4.05
	計	80	10.11	4.92
社会的 外向	晴れ*	60	12.75	5.77
	雨	8	10.50	6.12
	不明*	12	8.50	3.50
	計	80	11.89	5.69
社会 不適応	晴れ*	60	24.02	10.03
	雨*	8	33.25	7.44
	不明	12	28.17	7.38
	計	80	25.56	9.82
主導性	晴れ*	60	23.72	9.73
	雨	8	19.25	9.65
	不明*	12	15.25	6.48
	計	80	22.00	9.73

考 察

1. 「水のある風景」として描かれたもの

描画による「水のある風景」の表現は、箱庭での「水のある風景」よりも、水辺の種類が豊かになることが確認された。参考までに、箱庭での表現による「水のある風景」の主なものを表8に挙げておく。

特に注目すべきは、雨の表現と生活にまつわる水の表現がかなり多かったということである。また、件数は多くはないが、幻想的な水イメージが表現されることもあり、描画ならではの表現といえるだろう。

表8 箱庭での表現による「水のある風景」の水辺の種類

水 辺	男	女	計
川	11	10	21
海	10	7	17
湖	3	7	10
滝	3	1	4
池	5	3	8
そ の 他	2	6	8
計	34	34	68

2. 水のある風景の特徴とY-G性格検査との関連

(1) 「開かれた水」イメージ

開かれた水を描いた人は、器に入れられた水（コップや水槽の水など）や滴（雨など）を描いた人よりも協調性が高いという結果が得られた。

今回の調査においては、「自分にとって心地よい風景」や「好きな風景」を描くように教示を行ったわけではないが、描画後の感想として「落ち着いた」「懐かしい」などが多く挙がっていたことを考えると、多くの人が自分にとってじっくりくる風景を描いたのではないかと推測される。

大海原のように無限に広がる水は、その向こうにあるものの得体の知れなさを考えると脅威にもなりえるが、この水の広がりを心地よく感じる人にとっては脅威よりも可能性の広がりに感じられるのかもしれない。そのような人は他者に対しても警戒心が強すぎず、他者と協調しやすいと考えることも可能かもしれない。

(2) 「滴」イメージと「流れる水」イメージの比較

水の形態として「流れる水」を描いた人に比べて、「滴」を描いた人は一般的活動性が低いという結果が得られた。

水の流れに時間経過を見ることができると考えるならば、滴は対照的にその瞬間に留まっている表現であるということもできる。流れる水に対して、滴（雫）は止まっている水ということもできるだろう。「水」が動きを止めたというよりも、第三者（描き手）によって時間を止められたという印象を筆者はもった。敢えて時間を止めて瞬間に留まった表現を行っていること、これが一般的活動性の低さに繋がっているようにも感じられる。

(3) 水の「流れ」と「動き」を描くということ

流れの有無とY-Gとの関連からは、流れという方向性をもった水を描く人は方向性をもたない水を描く人よりも主観的であるという結果が、さらに動きとの関連からは、攻撃的性質が低く社会的内向が高い人が動きのない水を描くことが示唆されており、これらを合わせて考えると、川や滝などの流れを描くためには、ある程度の主観性とエネルギーが必要なのだろうと考えられる。

以前の箱庭での調査においても、水の流れと動きの有無とY-Gとの関連について分析を行った。その際、流れの有無については有意な効果はみられなかったが、動きの有無については、動きのない作品を作った被験者の方が、劣等感が強く、一般的活動性、支配性が弱いという結果が得られた。

箱庭での調査で「動き」との関連が認められた一般的活動性と、今回の描画で「動き」との関連が認められた攻撃的性質は、Y-Gにおいてはともに活動性因子とされている。箱庭においても描画においても、水の動きを表現するためには、ある程度の活動性が必要になると考えて差し支えないであろう。

(4) 「閉じられた水」と「器」の水

同じように閉じられた水を描いていても、器の中の水

を描いた人のほうが屋外の湖や池などを描いた人よりも主導性が低いという結果が得られた。

水はそれ自体に形はなく、器となるものの形に沿う形で落ち着く。これを水の柔軟性と捉えることもできるが、この水のあり様は人を不安にさせることもあるかもしれない。たとえ描画とはいえ、水を扱うことはかなりのエネルギーを要することであり、主導性の低い人は、器というきちんとした枠の中に水を納めることによって安定や安心を得たと考えることも可能だろう。

(5) 雨について

今回の調査で特に興味深かったのは雨の描画である。雨は天候を示すと同時に、ひとつの水の風景でもある。

雨に関する描画法としては、Hammer (1958) によって紹介された雨中人物画法がある。「雨」に象徴される不快なストレスのもとでの、自己身体イメージを知る目的で行われる一種の描画テストで「雨の中の1人の人間を描きなさい」という教示によるものである。我が国では、澤柳ら (1989) が体験の主体が自己であることを明確にする目的で「人」ではなく「私」を採用し、「雨の中の私」という教示で用いている。澤柳らは、「雨」をストレス、「傘」を防衛とする解釈仮説を用いている。

丹治ら (1993) は中学生に対して「坂道と私」、「雨の中の私」の描画とPFスタディを実施した結果、「雨の中の私」における「雨」は外的なストレスを表すのではなく、自己の内面における他責性、つまり狭義のアグレッションを反映していると考察している。

本研究においては、水辺の種類としての雨の特徴としては、他の風景を描いた場合よりも協調性のなさが高いという結果が、また、天候についての分析では、雨の風景を描いた人は他の天候の風景を描いた人よりも、協調性のなさが高く、社会不適応因子得点が高いことが確認された。社会不適応因子得点と、丹治らのいう狭義のアグレッションとの間にはなんらかの関係があるように感じられる。

今回得られた結果が、水の形態（滴として水を認識する）によるものなのか、天候としての影響なのかについては分からないが、「水のある風景」という教示を受けて自ら雨を描くことには、なんらかの意味があることに間違いはないであろう。今後、さらなる検討をしていきたい。また、今回の調査においては、思いがけず、絵の天候が不明であることの意味についても考えさせられた。天候が不明であるということ、被験者の描画への主体の関わらせ方が弱いと考えることも可能かもしれないし、意識的ではなくぼんやりとイメージに身を任せていた結果と考えることも可能であろう。また、被験者自身が天候へ関心を持ち、それを描画へ取り入れようとするためには、ある程度の社会的外向性と支配性が必要になると考えることもできるのではないだろうか。課題が風景の表現であったからこそ天候が意味をもつのか、どのような課題であっても背景となる天候は重要なのか、なども含めて今後検討していく必要がある。

3. 箱庭における「水のある風景」の表現との比較

(1) 水辺の特徴から

水辺の種類とY-Gとの関連についての分析では、今回の描画調査では海を描いた被験者と雨を描いた被験者の違いが際立ち、以前の海制作群と湖制作群の違いに注目させられた箱庭での調査とは、かなり異なる結果が得られた。その理由としては、まず、今回は箱庭では表現することが難しい雨の風景や生活に関わる水が多く表現されたことが挙げられるであろう。

また、箱庭は三次元の表現であるのに対し描画は二次元であり、描画で三次元の風景を構成するのは難しい。被験者によっては複雑な構図を避けようとする姿勢もうかがえ、これも結果が違った要因のひとつである可能性は否定できないだろう。

しかし、水の「動き」の表現に関しては、箱庭での結果と完全に一致したわけではないが、「動き」の表現には、被験者のなんからの活動性が関与している可能性が再確認できた。水の表現の意味を理解するためには、やはりどのような水を表現したのかを取り上げることは必要不可欠であろう。

(2) 「水」の箱庭表現と描画表現の相違点

また、今回改めて考えさせられた重要な点は、箱庭で水を表現する作業と、描画によって水を表現する作業は全く違うということである。箱庭の場合は、砂を掘ることによって水と出会う。河合(1969)は箱庭療法入門の最初のところで「箱の内側を青く塗ることは、砂を掘ったときに“水”が出てくる感じをだすため」とはっきり述べており、田熊(2008)は箱庭における水の表現について、「水」は最初からあるのではなく、「出てくる」という「水の出現のプロセス」が重要と考えられているといえたと述べている。これに対して描画では、もともと無色透明である水を表現する色を自ら選択し、あるいは探し、色を塗ることによって自ら水を作り出すという作業を行わなければならない。この違いは、水の表現を扱ううえで、箱庭と描画の決定的な違いであるといっても過言ではなく、これによって箱庭における水の表現と描画における水の表現では、かなり意味合いが違う可能性があることを考えさせられることとなった。

4. 今後の課題

(1) 描画表現による「水のある風景」として登場する水辺の種類、水の形態について

本研究においては、箱庭と描画の水表現の根本的な違いというものを自覚させられることになった。また、二次元にイメージを展開するからこそその描画の独自性も確認でき、描画でしか扱えない水イメージもあることを実感した。箱庭の調査と同じ教示を行っても、「水のある風景」の解釈が大幅に広がり、屋外の風景に限らずいろんな水イメージが表現されたことは注目すべきである。さらに、屋内の水の絵を描くことの意味を捉えなおすことができたことから、水イメージの理解をより広げること

とができたと感じている。

今回の分析においては、描画を分類する際に飲用水としてのコップの水とポット、花が挿してあるコップ、水槽などを、生活にまつわる水として大きくまとめて扱った。しかし、飲料水としての水と生き物を育てる水とは、そこに込められたメッセージは違い、それを同じように扱うのはやや乱暴であろう。今後は被験者数を増やし、水辺の種類を厳密に行うことが、より複雑な水イメージの理解のためには必要であると考えている。

(2) 作品の評価について

今回の描画調査においては、「水の形態」という視点をもって水の描かれ方に注目し、検査者が作品を分類し、分析に用いた。これによって、新たな分析結果を得ることができたことから、「被験者が何を描いた(と自覚している)か」の分析と「何がどう(客観的に)描かれているか」の両方を分析することの重要性和難しさを改めて感じるようになった。今後は、描画後質問紙の工夫や第三者による印象評定なども行いながら、さらに描画の評価・理解を進めていきたいと考えている。

(3) 水に対するイメージと表現される風景の関連を探る

描画後質問紙には、被験者の一般的な水に対するイメージや、描いた作品の水イメージについて尋ねる項目を設けてはいるが、そのイメージと作品とを繋げて理解することが出来なかったことが今回の反省点として挙げられる。今後はSD法などを用いて被験者の水イメージを捉え、描画との関連を探っていきたい。

水に対するイメージと水の表現の関連については、多田(2007)が興味深い研究を行っている。九分割統合絵画法を用いて「水」ということから思ったことや感じたことを出来るだけ絵で(どうしても絵にできない時には文字・図形・記号を認める)表現させ、独自に作成したSD法尺度により水イメージについて評定してもらい、その関連を探るといものである。多田の研究で特に興味深いのは、水のイメージについて因子分析を行った結果、因子を「聖母」「アフロディーテ」「ニンフ」と名づけ、水イメージを女神のイメージで捉えようとしている点である。このような視点も参考にしながら、水イメージと水表現の関連の探求を続けたい。

おわりに

「水」表現の治療的効果の可能性を求めて

私たちは、さまざまな風景に抱かれて生きている。そして、常に風景からいろいろなメッセージを受け取りながら生活している。千田(1992)は風景論の三つのレベル、「肉眼による風景」「意識の中の風景(イメージに捕われた風景)」「風景の祖型性(人類に共通する風景)」を挙げている。さらに、「風景の身体性」「風景のイメージ性」「集団無意識の風景」の三つの視点を挙げており、これらはそのまま上述の三つのレベルに対応するものと思わ

れる。そして、これらの視点は、「風景が身体・意識・無意識という人間の全体性と深く関わりをもつことを示そうとするものである」と千田は述べている。

筆者は、箱庭での調査を行ったときに、水のある風景を作ったあとに被験者から「懐かしかった」とか「昔を思い出した」という感想を聞いて衝撃をうけ、水のある風景を表現すること自体に治療的効果があるのではないかと直観した。箱庭制作をしながら、千田のいう風景の三つのレベルを往還し、風景を通じて自分自身に深く出会うことができた被験者がいたのではないかと感じたのである。その時点では筆者は、箱庭は三次元であるから、より一層没頭しやすいのではないかと考えていた。しかし、今回は描画による表現であったが、ここでもそのような体験をした被験者が多く存在したように感じられた。描画表現でも、風景の表現を通して自分自身に深く出会うことは可能であるように思われた。

先ほど、水を表現する作業は、箱庭と描画とでは全く違うと述べた。描画による水の表現は、自分で水を作り出さなくてはならないのである。作品に色を塗りこめることによって、自分の水との対話がなされる場合もあるのではないだろうか。以前の筆者は、三次元の表現である箱庭では、箱庭のなかに入り込んで制作することが比較的容易であることに対し、描画表現は二次元であるため、描き手の視点は遠くなりやすく、客観的な視点になりやすいのではないかと考えていた。しかし被験者たちの色を塗るという作業を見守るうちに、色を塗る（水を作り自分の手で納めていく）という作業は、自分自身を主体的に深く描画に関わらせることになり、その結果、自分自身と深く出会うことになるのではないかと考えるようになった。

また、箱庭での水の表現は水が「出てくる」、水と出会う過程が重要であることを先述したが、最近は箱庭のミニチュアが充実していることもあり、水辺のミニチュアを置くだけで水を表現することも可能になっている。同じ箱庭における水表現でも、砂を掘ることによる表現と、ミニチュアを置くことによる表現とでは、その意味は全く違ってくるだろう。

箱庭であっても描画であっても、作り手や描き手が水と出会ったり水と向き合ったりする作業を、見守り手がしっかりと共有することから水の表現の意味の理解が始まり、またそれが、治療効果の可能性へと繋がるのではないかということを改めて感じているところである。

参考文献

- Anderten, K. (1986) : Traumbild Wasser : Vom der Dynamik unserer Psyche. 渡辺学訳 (1992) : 水の夢—心のダイナミズムについて. 春秋社.
- Bachelard, G. (1942) : L'Eau et les Rièves : Essai sur l'Imagination de la Matière. 小浜逸郎・桜木泰行訳 (1969) : 水と夢 物質の想像力についての試論. 国文社.
- Berque, A. (1990) 篠田勝英訳 : 日本の風景・西欧の景観—そして造形の時代. 講談社.
- Chevalier, J & Gheerbrant, A (1982) : Dictionnaire des Symboles. Robert Laffont et Jupiter. 金光仁三郎・熊沢一衛・小井戸光彦・白井泰隆・山下誠・山辺雅彦訳 (1996) : 世界シンボル大事典. 大修館書店.
- Hammer, E. F. (1958) : The clinical application of Projective Drawing.
- 樋口忠彦 (1981) : 日本の景観—ふるさとの原型. 春秋社.
- Jung, C. G. (1954) : Von den Wurzeln des Bewußtseins. 林道義訳 (1982) : 元型論. 紀伊國屋書店.
- 皆藤章 (1994) : 風景構成法—その基礎と実践. 誠信書房.
- 河合隼雄 (1969) : 箱庭療法入門. 誠信書房.
- 三宅理子 (1997) : 風景としての《水》とそのイメージ 甲南大学臨床心理研究 6 ; 87-94.
- 三宅理子 (2004) : 箱庭で表現される「水のある風景」とY-G性格検査との関連—風景としての水イメージの重要性 島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要 2 ; 11-23.
- 澤柳志津江・石川元・川口浩司・大原健士郎 (1989) : 「雨中人物画」にあらわれた森田療法の治療過程 臨床精神医学 18 (1) ; 81-89.
- 千田稔 (1992) : 風景の構図—地理的素描. 他人書房.
- 多田和外 (2007) : 水イメージに関する一研究—九分割統合絵画法とSD法を用いて 箱庭療法学研究 20 (1) ; 3-18.
- 田熊友紀子 (2008) : 水イメージからみた心理療法. 日本評論社.
- 丹治光浩・松本真理子・今泉寿明 (1993) : 描画法におけるストレスの投影性に関する研究—課題画「坂道と私」「雨の中の私」の比較を通して 臨床描画研究 Ⅷ ; 202-212.

